ゲゼルの乳児の心理学など、生まれてから幼児になるまでの発達を、もう一度知っておくことが、二学期からの保育に非常に役に立つと思われるのです。また、波多野完治先生の心理学入門などをサッと目を通し、発達途上での心理的現象をとらえるのに役立つと思われるのです。

私たちは、今担任している子どもの年齢に、関係のある部分や書物しか読まないくせがついてしまっているのではないでしょうか。乳児から、このように発達してきて、現在、このようになるのだ、自分の担任しているクラスの子どもたちは、こうだと比較して考えることをしたいものです。

もうひとつの提案は、

月刊保育雑誌の前年分を読みなおしましょう。連載の特集など、つづけて読みなおすと、また新たなものを得ることができるのです。

そして、必要な記事を切りぬき、小冊子を作るのもたのしく、身になるものです。

幼児文学、児童文学（童話・物語・民話）の本を、たのしみながら読むようにしましょう。どんな童話が、どこの国のだれによって作られたかなど、系統的に名作を読むことが大切です。むかしむかしなど、民話の本を一日ひとつずつ読むようにし、二学期の話のたねをたくわえるようにしたいものです。

夏休みの読書は、何をどう読むというよりは手持ちの書物の読みなおしをおすすめします。

ホーマーレイン・ゲゼルなど、どんなものでもまとまった書物をずっと目を通しなおすことが大切です。名作童話なども、代表作を読みなおし子どもにあたえられるようにしておきましょう。

月刊誌などもばかにせず、前年度分の読みなおしなども、思わぬひろいものがあるものです。

夏休みのための読書のすすめ

倉橋惣三選集（第四巻）保育案を中心として

神沢良輔

倉橋惣三については、いまさら紹介する必要はないが、倉橋惣三の著作が選集の編集によって、手近なところで読めるようにな

ったことは誠によろこばしいことである。この中で、一巻から三巻までは〝著者自身の手によってまとめられたもの〟であり、そのうちのいくつかは、戦後においても単行本として出版されているものもあって手にすることができた。

これらの著作は、私どもが保育の中で苦しんでいるときには、慰めてくれるとともに勇気づけをしてくれたし、楽しいときには、いっしょになって喜んでくれた。そして、高くて深い幼児教育の本質を、理論を通して、また実践を通して、読むたびに新しいものとして教えてくれた。

それは、幼児の尊厳を守りぬこうとする教育、そのために幼児とともに成長しようとする教師の自己向上の努力などに対しての著者の情熱に感激したということでもあろう。

さて、第四巻の内容は、著者自身の手によってまとめられたものではなく、〝著者が長年にわたって、諸種の刊行物に印刷発表〟したものから編集者によって選択されたものである。もちろん、前述のような著者の考え方は、第四巻においても変りがないが、その中で、とくに〝保育案〟についての著作は、戦後幼児教育に関係したものにとっては、ひじょうに参考になる。

この第四巻におさめられている、保育案に関係する著作は二つあって、一つは昭和十一年の夏の講習会の速記で、〝幼児の教育〟誌九月号に記載されたもので、〝保育案〟として、選集の巻頭に紹介されている。

もう一つは、〝系統的保育案の解説〟として、昭和十年七月に出版された〝系統的保育案の実際〟の中から抜粋されたもので、選集の〝実際編〟のはじめに紹介されている。

これらのものは、昭和九年に出版された〝幼稚園真諦〟（選集第一巻に収載）で示した〝誘導保育案〟をさらに前進させたものであろうと考えられる。

ここでいう〝保育案〟ということばを、現在のことばでいいかえれば、〝指導計画〟ということばになろう。さて、戦後における指導計画についての考え方の変遷を、文部省の示した幼稚園教育要領を中心として簡単にみていくと、まず、戦後ただちに公刊された〝保育要領（昭和二十二年度）〟においては、〝幼児の一日の生活〟として簡単にディリー・プログラムを示したにすぎないのであるが、昭和三十一年版の〝幼稚園教育要領〟においては、いわゆる六領域とともに、〝指導計画の作成〟ということばが前面にうち出された。

そして昭和三十九年版〝幼稚園教育要領〟においては、〝指導および指導計画の作成〟ということで、指導計画についての考え方は、三十一年版よりは、そのきびしさが後退したように受けと

られるのである。しかし現場においては、指導をおきざりにして、指導計画の作成にうき身をやつしている場面もあるのである。

ここらでもう一度、戦前の倉橋惣三の考え方をじっくりみつめなおして、保育の発展のあとをふり返りつつ、保育そのものの反省をするのもよいことだと思うのである。

指導計画の作成に熱をあげていると、いちばんたいせつな幼児のことを忘れて、とんでもない落し穴が足もとにあるのに気づかない場合も多いと思うからである。そして、いわゆる〝ねらい〟だとか、〝単元〟〝主題〟〝六領域〟のとりこになってしまわないとも限らない。

選集には、他にもよい著作があるが、それの紹介は省略するが、もちろんそれらについてもよんでいただければと思う。

夏休みのための読書のすすめ

「日本のむかし話」三巻

村山桂子

私は、四歳になる娘のために、毎日、いろいろな絵本や、お話の本を読んでやります。と、いうより、読まされているのですが、そうした本の中から、子どもばかりでなく、私たちおとなが読んでも、たのしい本をみつけました。

私は、その本を、みなさんにおすすめしようと思うのです。

それは「日本のむかし話」（松谷みよ子・文　瀬川康男・絵　講談社発行　全三巻　各五三〇円）という本です。

ここにでてくる数多くの民話は、もちろん安直に書かれたダイジェスト式のものではありません。著者である松谷氏自身が、日本の各地へ出かけて採集した民話の原話をもとに、松谷氏が自分自身の文学として仕上げたものです。単純で明解な、しかも土のにおいの失われていない文章は、まことにみごとです。